

HP に「ミニ美術館」を作るにあたって (3/3)

HP 管理室

目次

1. はじめに
2. 『聖母マリア』と『女神ヴィーナス』
3. 『裸のマハ』と『着衣のマハ』
4. オダリスク
5. 「神話ヌードは OK、現実ヌードは NG」のダブルスタンダード
6. ルノワール
7. オフィーリア
8. 美女の容姿
9. おわりに

6. ルノワール

ピエール＝オーギュスト・ルノワール（1841－1919）は、フランスの印象派の代表的画家ですが、後期から作風に変化が現れ始めたので、ポスト印象派の画家とされることもあります。風景画、花などの静物画もありますが、代表作の多くは人物画です。

1860 年代を代表する作品の一つに『ラ・グルヌイエールにて』があります。パリに程近いブージヴァル近郊セーヌ河畔の新興行楽地であった水上カフェのある水浴場「ラ・グルヌイエール」で、1869 年夏に友人であるクロード・モネと共に同地へ赴き、画架を並べ描いた作品としても広く知られています（図 18 参照）。モネが光の視覚的な現象や印象、効果に忠実であるのに対し、ルノワールでは水面に反射する光の繊細さと叙情性がより強調されています。色彩においてはルノワールの絵はよりカラフルで人々により情感を感じます。

もともと人物、特に若い女性の健康な肉体の輝きに魅力を感じていたルノワールは、1890 年代以降の円熟期に入り、女性の温かい肉体を描き出すようになりました。肌はピンクがかった赤から、バラの紫がかった赤まで、様々な赤で生き生きとした表現になりました。1860 年代初頭から 1890 年代以降の円熟期の間に描いたいくつかの裸婦像を図 19 に並べます。肌の色がより赤みをおびてさまざまな色合いに替わってきたことがわかります。ルノワールは、「私の好きな絵画は、風景ならばその中を散歩したくなるような絵、裸婦ならばその胸や腰を愛撫したくなるような絵だ。」と語っているとおり、見る人を喜ばせるような絵を描き続けました。そこで裸婦像に神話的テーマはほとんど見られません。



(a) ルノワール



(b) クロード・モネ

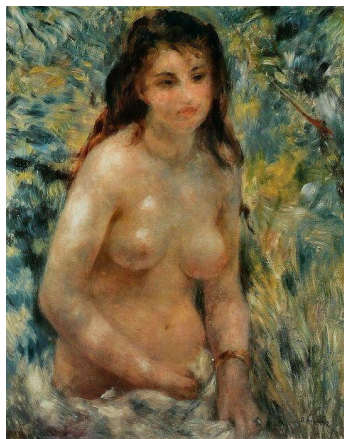
図 18 『ラ・グルヌイエールにて』 (1869 年)



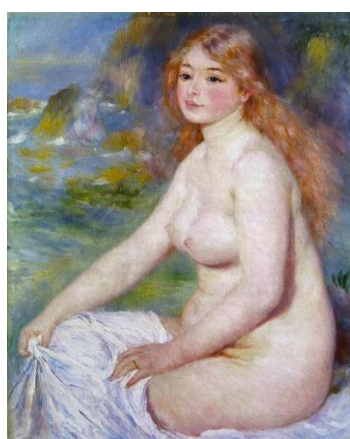
『狩りをするディアナ』(1867 年)



(1870 年)



(1876 年頃)



『ブロンドの浴女』(1881 年)



『大水浴図』(1884-87 年)



『パリスの審判』(1913-14 年頃)



『浴女たち』(1918 年頃)

図 19 ルノワールが 1860 年代初頭から 1890 年代以降の円熟期の間に描いた裸婦像：肌色や色合いが変化してきたことに注目

7. オフィーリア

美しい絵画の一つに、ジョン・エヴァレット・ミレーの『オフィーリア』(製作 1852 年)があります。歌を口ずさんでいるような穏やか顔の若き貴婦人(オフィーリア)が、美しい森の中の小川で漂っているような仰向けの姿で描かれています(図 20 参照(a))。

オフィーリアは、イギリスの偉大な劇作家ウィリアム・シェイクスピアの四大悲劇(「オセロー」、「リア王」、「ハムレット」と「マクベス」)の一つ「ハムレット」において、悲劇のヒロインです。恋人ハムレットに父親を殺され、気がふれたオフィーリアは、とある小川にやってきます。キンポウゲやイラクサ、ヒナギクなどで花冠を作り、それをシダレヤナギの枝にかけようとして木によじ登ったとたん、枝が折れて川に落ちてしまいました。オフィーリアは水から上がろうとせず、歌やうわごとを口ずさみながら、人魚のように川を漂い、こと切れてしまいます。

ミレーの絵画『オフィーリア』はこの彼女の最後の場面ですが、実際の舞台では登場のシーンはなく、王妃ガートルードが発した台詞から創造したものです。制作において、オフィーリアにはモデルがいました。後に友人の画家ロセッティの妻となるシダルという女性です。ミレーは先ず画の背景となる適当な地をロンドン郊外に探し、5 ヶ月かけて背景を描きまし

た。その後、ミレーはシダルをモデルにしてオフィーリアを描き込みました。衣装を自分で買い、それを着せたまま、実際にシダルをバスタブに入れてスケッチしたと言われています。その徹底したリアリティ追求の姿勢は、一つの余計なエピソードも生んでいます。長時間バスタブにつかるモデルのために、ミレーはバスタブの水をガスランプで温めていました。ところが、いつのまにか火が落ちてしまい、シダルはひどい風邪を引いてしまいました。怒ったのは彼女の父。彼はミレーを告発し多額の治療費を請求したのだとか。

このようなオフィーリアの最後の名場面は、美しいモデルやトピックス（例えば、受胎告知、オダリスクなど）の場合と同様、多くの画家に同題の絵画が生み出させています（図13 参照）。このような背景の下、HP ミニ美術館では似たような構図の美しい絵画が自然と多く集まっています。



(a) ミレー（1852 年）



(b) アーサー・ヒューズ（1863 年）



(c) トーマス・フランシス・ディックシー(1873 年)



(d) アルフレッド・ステヴァンス
(1887 年)



(e) ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス
(1889 年)



(1894 年)

図 20 多くの画家による『オフィーリア』（続く）



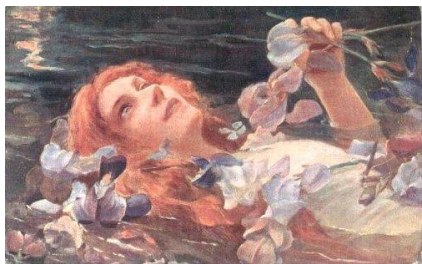
(f) ウジェーヌ・ドラクロワ
(1844 年)



(g) Leopold Burthe
(1851 年)



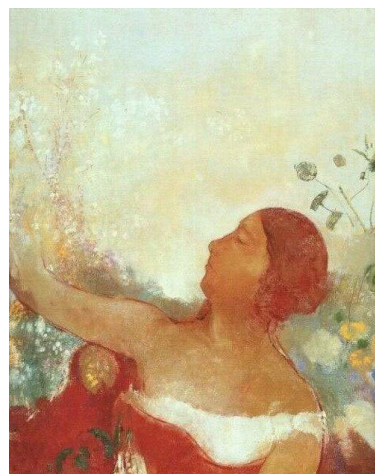
(h) アレクサンドル・カバネル作
(1883 年)



(i) Gaston Bussiere
(1900 年)



(j) ポール・アルバート・ステック
(1894 年)



(k) オディロン・ルドン
(1903 年)

図 20 多くの画家による『オフィーリア』

8. 美女の容姿

美女とされる容姿はその時の文化（or 美意識）に依存しますので、現在の美女とは少しずれがある場合があります。例えば、図 4 『春（プリマヴェーラ）』（製作 1482 年頃）や図 10 の『眠れるヴィーナス』（製作 1510 年）と『ウルビーノのヴィーナス』（製作 1538 年頃）の美女たちにおいて、お腹がポッコリと少し出ていることに気付かれたかもしれません。絵画ですから多少の誇張があるでしょうが、当時は少し大きいお腹が美女の条件だったようです。

同じことは、日本の平安美人と現代美人とのギャップにも見られます。平安美人の顔立ちは、しもぶくれ、細い目、おちょぼ口、とがった小さい鼻であり、サラサラの長い髪の女性です。さらに、声の良さや和歌を詠む能力といった教養も美人の条件だったようです。小野小町、藤原薬子（ふじわら の くすこ）、藤原高子（ふじわら の こうし/たかいこ）、和泉式部、藤原璋子（ふじわら の しょうし/たまこ）、ときわ御前（ときわごぜん）などのタイプが美人といわれています。

9. おわりに

HP ミニ美術館の創設に伴い、美をテーマとして先ず思いうかぶ絵画は、美術教科書でおなじみのダ・ヴィンチの『モナリザ』、ラファエロの『聖母マリア』、そしてボッティチェッリの『ヴィーナスの誕生』でした。後者には、ギリシャ神話で語られている通り、女神ヴィーナスが“成熟した大人の女性”として、海より誕生し出現した様が描かれています。絵画における初めての全裸像です。この絵画は、古代ギリシャやローマを手本とし中世までのキリスト教を中心とした視点を、人間を中心にした視点に戻そうとする文化革新運動（ルネサンス：14～16世紀）における、イタリア 初期ルネサンス時代の作品です。

画家は現代においてこそ芸術家ですが、ルネサンス期やそれ以前においては、「絵を請われて描く」という基本行動からは職人でした。ギリシャ神話は、多くの神々が登場し、人間のように”愛憎劇”を繰り広げる物語です。そのために、神話のインパクトある想定場면을題材とすれば、そこには裸婦像がたびたび現れるのです。裸婦像に関して、「理想化された神話ヌードはOK、写実的な現実ヌードはNG」というダブルスタンダードがありました。このダブルスタンダードは、19世紀前半頃になって次第に形骸化していきます。それぞれの時代において、画家が描くヌード像の作品にはその画家の想いや生き様が反映されています。

本HPの“美”テーマのミニ美術館において、結果として裸婦像に関する絵画などが多くなっています。もちろん、それに該当しないものもあります。また、同じタイトルであったり、似たような構図であったりする美しい絵画群ができています。これは、美しいインパクトのある絵画が作製されまると、同世代や世代を超えた多くの画家がそれにインスピレーションを受け、それと同じタイトルや似たような構図の美しい派生絵画を描くからです。例えば、タイトルでは『ヴィーナスの誕生』、『オダリスク』など、女性のポーズでは「体軸を逆S字型に曲げて立つ“コントラポスト”」、『恥じらいのヴィーナス』の手のポーズなどが例として挙げられます。

ともあれ、当美術館で流れてくる絵画や彫刻などをぼんやりと眺めていく中で、癒されたり、共鳴したり、エロスを感じたり、「なぜ？」と思ったりなどして、明日に向かっての奮い立ちの気力Upにお役に立てられるのであれば本望です。